

た影響に現われている。50年代から70年代まで、出身家庭が青年の成長に与えた影響は非常に深刻であった。まず、出身家庭は個人が高等教育を受ける機会に影響した。出身家庭の良い悪いは当時の大学生採用上の重要な参考指標であったが、大学の重要な専攻科目、先端技術に触れる可能性がある専攻科目では、出身家庭の良い者だけが採用された。出身家庭の悪い者は採用されない。当時、少数の海外留学機会は百パーセント出身家庭の良い者に与えた。その次、出身家庭は個人の就職機会に影響した。計画経済の下では、人々は職業選択の自由度が非常に少なかった。若い人の就職はほとんど組織的な配置によるものであったが、就職時の組織的な配置は出身家庭を非常に重要視した。当時、政治的雰囲気は濃厚の中で、多くの職業は政治的感性を持つことが求められた。例えば、航空、国防、軍事産業、ハイテク技術、保安、管理部門、指導部門、情報部門、税関などのような職業である。これらの職は出身家庭の良いものによって担われる。末端部門にくると、本来政治的感性はないはずであるが、指導者はしばしば当時の政治的規準を以って、重要な仕事を出身家庭の良い者に担当させる。さらに、生活の諸方面で、出身家庭がもたらした影響は非常に重要であった。例えば、当時の人々は皆軍隊に入ること、共産黨員になることを目指したが、出身家庭が決定的な作用を果たした。また、婚姻配偶の選択では、出身家庭もしばしば重要な指標になる。

以上の出身階級、出身家庭は一種の等級制度と身分制度に似ていた。基本的には閉鎖的社会階層関係であり、すなわち出身階級、出身家庭は一度定位されると、変えることができない。もちろん当時の政治的階層制度では完全に社会移動がないわけではない。当時、政治的地位の変遷の各形式が存在した。例えば、“下放”¹⁰⁾である。50年代以後に比較的流行した政治的地位の垂直下降の形式であるが、それは主に幹部を対象とした。“下放”には一般的に二重の意味が含まれている。一つは職位の下降であり、もう一つは仕事と生活地域が中心地域から周辺地域に移動すること。例えば、50年代末、反右闘争が終わった後、多くの幹部が

北京から遠い地方の農場に追放されたことがある。追放は長期追放と短期追放に分けられていた。長期追放は一般的に幹部が政治的な過ちを犯した時、受けた処罰である。短期追放は実践的に鍛えさせる意味が多く含まれていた。文化大革命の中で、幹部追放は普遍化した現象となった。

“戴帽子(レッテル貼り)”“摘帽子(レッテル取り)”と言う言葉が生まれた。50年代以降、歴代の政治運動の中で、多くの人々は政治的なレッテルを貼られた。例えば、“右派”、“壞分子”、“歴史的な反革命”等等、個人がレッテルを貼られると、敵対分子側に回され、政治的どん底に追い込まれる。“摘帽子”は比較的難しいことである。もちろん一部分の少数者は極端な政治的表現によってレッテル取りが成功したことがある。レッテル貼りとレッテル取りはエドウィン・レマート(Edwin Lemert)が「ラベリング理論」で述べた相互作用行為に似たようなことであろう。

次に“一批、二養(一批判、二養う)”と言う言葉がある。これは文化大革命中の政治的地位変遷の一つの形式であった。政治的過ちを犯した老幹部に対して、一つは政治的な批判を行う。被批判者の政治的地位が大きく下降されたことを意味しているが、必ずしも経済的地位の下降を意味しない。“二養”とは、政治的批判を行った後、経済上の生活待遇を保障することである。したがって、それは政治的地位と経済的地位の典型的な相反現象である。

続いて“被打倒”という言葉がある。これは文化大革命中の指導者幹部の政治的地位が急速に下降する一つの形式を指す。一人の幹部が被打倒されるのは、彼(彼女)は幹部の職位を失うだけでなく、名誉までどん底に落ちることを意味する。政治的には、彼(彼女)が地位の高い指導者集団から社会の政治集団の底層に追放される。もちろん被打倒は経済的地位の急速な下降に伴う可能性があるが、経済的地位の変遷とそれほど密接な関連を持たない可能性もあり得る。なぜならば、被打倒は主に政治的地位の変遷であり、経済的地位の変遷ではないからである。

さらに“平反(名誉回復)”“解放幹部(幹部を

10) 訳者注：農村や地方に追放される意味である。